

## 「東アジアジュニアワークショップ参加報告書」

京都大学文学研究科修士1年 伊藤志帆

今回の東アジアジュニアワークショップは、私にとって2度目の参加でした。以前参加したのは2013年の京大開催の時だったので、準備や案内のために日本社会の問題について考え直すいい機会となりました。それに対して今回は台湾大学での開催であるため、2度目とは言うものの前回とは異なる経験を得ることができました。

## ＜フィールドトリップ：8月14日（金）—8月16日（日）＞

ワークショップの前半3日間は台北市内でのフィールドトリップにあてられました。「都市空間をどのように統治するか」というテーマに沿って訪問先が選ばれており、台湾大学の学生がよく練られた計画にまず驚かされました。このツアーで私がもっとも印象的だったのは、急速な経済発展を果たした首都台北の抱える矛盾です。まず、ツアーでは行政や経済の中心である信義区や中流階級の人々が住む民生社区など大きく発展している場所と、ホームレスが多く見られる萬華区など貧困層が集う場所とを比較することで台北内の格差に気づくことができました。また台北ドーム建設に対する反対運動からは、政府の開発と市民の環境保全への要求との対立を知りました。このように台北ならではの格差や矛盾などの存在に気づきましたが、それと同時に、台北の街を歩きかう人々からはそれに負けない情熱を感じました。精力的な社会運動や街中で熱っぽく話す人々など、日本人にはないパワーがあると思います。このように台湾社会への理解を深めるとともに、ツアーを計画した台湾大学の学生のから学ぶことも多くありました。特に、彼らの積極的に社会に関わっていかこうとする姿勢をみて、自分には身近な社会を観察して社会的問題を発見する能力がまだまだ足りないのだと思い知らされました。

## ＜プレゼンテーション発表：8月17日（月）—18日（火）＞

私は自分の英語能力に対してかなり不安があり、合計30分が割り当てられている発表と質疑応答をととても長いと考えていましたが、終わってみればあっという間でした。語学力の限界からうまく質問に答えられずもどかしい思いをしたものの、約20人の参加者を前に発表をやり遂げたことは自信につながりました。さらに多くのコメントを得られたことで研究の視野が広がり、自分の研究の意義について日本国内だけでなく世界的な視野をもって考える必要があると気づかされました。また、自分の発表に対する反応だけではなく、他の学生の発表からも自分の今後の研究へのヒントを得ることができてとても有意義でした。例えば彼らの発表と自分のものを比べると、聞き手にわかりやすい発表をするために論理の展開を明確にすることや方法論を明確にすることなどが今の自分には欠けていると思いました。

## ＜全体を通して感じたこと＞

今回のワークショップは京大からの参加者が4人と少なく、話しているグループの中で自分だけが日本人という状況がよくありました。積極的に他の大学の参加者と会話をしていこうと渡航前に目標を立てたものの、なかなか会話で発言できないことも多く「シャイだね」、「静かだね」と言われることもありました。語学力や会話力というものはいきなり進歩するものではないのでこの問題とは長く付き合っていかなければならないと思いますが、他大学の参加者のように「思ったことを素直に口に出す」という姿勢を忘れないようにしたいです。今回の渡航中は、何か言いたいことがあっても発言を躊躇しているうちに話題が変わってしまい黙ったままだったという悔しい思いを何度もしたので、英語の能力と共に会話の瞬発力も高めていきたいです。